セーラームーン
神聖かまってちゃん

はじめに一

「孤独はつらい。群衆の中の孤独はもっとつらい。ならばいっそずっと一人ぼっちでいた方がいいなんて考える。でもやっぱり一人は辛くなって、外に出る。そうするとまた孤独を味わう。そうして一人でいることを選ぶ。やっぱり誰かがいると信じて外に出てみる。(中略)　元々、ロックはダウナーな人のためのものだ！」

語って欲しいバンドを語ってくれない音楽雑誌やライターに我々、は反旗をひるがえそう！

これは、神聖かまってちゃん評である。そ、ニートの。。。
音楽の文脈を知っている音楽ライターが書かないから、
20代のks底辺が違った角度から「神聖かまってちゃん」評を紹介します。

今回は、幾原監督の『美少女戦士セーラームーン』を軸に、神聖かまってちゃんを一〇年代を代表するロックバンドとして語っていきます。

【セーラームーンと神聖かまってちゃん】

ーこんなのアニメでしょ？　だけど、それは、私たちの真実につながっている

セーラームーンR
—音楽集—

内容をざっと紹介しておこう。

物語の基本的な枠組みは、よくあるヒーローものの物語である。

内容をざっと紹介しておこう。

物語の基本的な枠組みは、よくあるヒーローものの物語である。

月野うさぎ（セーラームーン）の前に異星人フィオレが現れる。彼はうさぎの恋人である衛の幼い頃の友人だった。フィオレは衛の心をもう一度自分に向かせようとする。しかし、悪魔の花が心にとりついて衛はうさぎに騙されていると誘導する。セーラー戦士たちを攻撃、衛の言葉でもフィオレを止めることはできなくなり、悪魔の花によって憎悪を増したフィオレは衛すら攻撃してしまう。地球上の人間のエナジーを全て吸い尽くそうとするフィオレ。地球に小惑星が落ちようともしていた。セーラー戦士たちは人類滅亡を阻止するべく戦いに向かう。

あ

　前半、作品はよく出来たヒーローアニメとして進行する。敵の襲来とその撃退に登場人物たちの人間関係が絡むオーソドックスなものだ。このときはまだコミカルなシーンや「お約束」も多く、視聴者はわくわくしつつも安心して観ることができる。

　決戦に向かった後半、物語は力と力を争うマッチョな戦いに帰結しない。

↓

「お前におれの孤独が分かるものか！」という叫びと共にフィオレの回想ではなく何故かセーラー戦士たちの回想が始まる。

　決戦に向かった後半、物語は力と力を争うマッチョな戦いに帰結しない。

　フィオレの攻撃によってセーラー戦士が倒されてしまう。うさぎだけが残り、仲間を助けたいなら抵抗するなと言われる。自分たちのことはいいから戦いなさいと言う仲間たちの言葉を振りきって戦いを止めたうさぎ。フィオレは容赦ない攻撃をする。

そのときに発せられる「お前におれの孤独が分かるものか！」という叫びと共にフィオレの回想ではなく何故かセーラー戦士たちの回想が始まる。↓

セーラームーンがトドメをさされる瞬間にセーラー戦士がつぶやく

「うさぎに出会わなければ私たちはずっと独りだった」

セーラー戦士すら世界を呪っていたことが明らかになる瞬間

人はみんなフィオレだ。

うさぎに出会わなければヒーローであるセーラー戦士すら世界を呪っていたことが明らかになる瞬間だ。

例えば「人は独りなんだ」という格言がある。でもそれは、もう一人でなくなった者や、一人になりたいときになれる選択できる者が上から目線で言ってる言葉に感じられてしまう。

孤独で膝をかかえて苦しんでいる人間に対して孤独は良いなんて無神経なことを言える人間がいるなら、その場で石版持っていたのなら恐らくニーキックで真っ二つに叩き割っていたであろう。↓

「なにか」が欲しかった。

孤独はつらい。
群衆の中の孤独はもっとつらい。
ならばいっそずっと一人ぼっちでいた方がいいなんて考える。
でもやっぱり一人は辛くなって、外に出る。そうするとまた孤独を味わう。
そうして一人でいることを選ぶ。やっぱり誰かがいると信じて外に出てみる。そのループにはまる人間はJAPAN読者にもいるだろう。ぼくもそうだ。しかし、周りを見渡すとどうも自分だけらしい。高校生になれば大学生になれば社会に出れば、なにかすごいものが手に入れられる気がしていた。
それは、学歴やお金みたいな目に見える単純なものじゃなく、もっと、目に見えなくても胸を満たすもの。その「なにか」が欲しかった。自分が歳を得ていけば「なにか」が自動的に手に入るのだと思っていた。
いや、実際に自動的に手に入る人だっているんだろうと思う。
ぼくがアンラッキーだっただけ、ということも要素のうちのひとつであることは疑いようがない。

ロックンロールに出会わなければ私たちはずっと独りだった

けれども、それ以上に、自分が何もしなかったということがある。

劣等感に埋もれたままひたすら動かないでいた。
それがぼくだけじゃないと信じている。

自分だけじゃないんだと思えたのはロックンロールに出会ったからだ。

何も信じてないこの世の中でひとつだけ信じられるものがロック、というか、そんなカッコイイ言葉じゃない、ロックンロールくらいしか自分の興味あるものがないだけである。

だって自分をすくい取ってくれたものだったから。
それに足を向けて寝れない。
セーラー戦士の言葉を借りるなら「ロックンロールに出会わなければ私たちはずっと独りだった」である。
だからといって友達ができたり増えたりしないところが残酷なところだなあと思う。

ロックはダウナーな人のためのものだ

だからこそ、いつまでもロックは孤独な人間のためのものである。

最近では、曲が暗いとそれだけでマイナスの評価を受け、もっと明るいものにしろよという聞こえない声を感じるが、

そもそもロックはダウナーな人のためのものだ。アッパーな人間のための音楽なんて聴きたくない。

神聖かまってちゃんの登場

神聖かまってちゃんの登場は痛快だった。
ロック界隈に殴り込みに来て「死ね！」と叫ぶ。
の子が叫ぶたびに自分がこの世界にいることを世間に示されているような感覚がある。

そうそう、それが聞きたかったんだ、もっともっと、このクソみたいな世界におれたちがいることを、存在しているという証明をぶちまけてくれ、という気持ちで嬉しくなった。

の子から出てくる詞はまるでぼくの内蔵の裏側から出てくるような、普段人には言いたくても言えないような言葉だった。孤独を知ってる人間の言葉だ。
ぼくは親もいるし、「本当の孤独はそんなもんじゃない」と人から言われたらそれはそうなんだろうなあとたじろぐ。
でも、じゃあぼくが今感じている孤独感は無視されていいものなのか？と問うとぼくは大きな力で「無視されていいわけがない。おれは孤独だ」と叩きつける。↓

ゆーれいみマン

ゆーれいに僕はなるのさ
今日こそはキメてやるのです
自殺しちゃうぞと叫んでも
誰からも返事ございません
存在ゆーれい存在ゆーれい
存在ゆーれいゆーれいみマンな僕
もし死んだら
誰か見てくれるのかなぁ
僕のことを

有名になるといいつつ
ゆーれいになる僕がいます
可愛そうだからこいつに
あげぱんでも買ってあげなさい
存在ゆーれい存在ゆーれい
存在ゆーれいゆーれいみマンな僕
もし死んだら
目撃してくれるか君
僕のことを
≪かまってもらいたいだけなんだろぅ？
早く死ねよボケっっ！≫
と風がそよぐ

その忘れられたような
窓際の席で
目が合うとしたならば
素敵なことですね！
日に照らされた時、
そこには椅子だけじゃ
なんとなく寂しいけど
仕方ないですよね

(ゆーれいみマン)

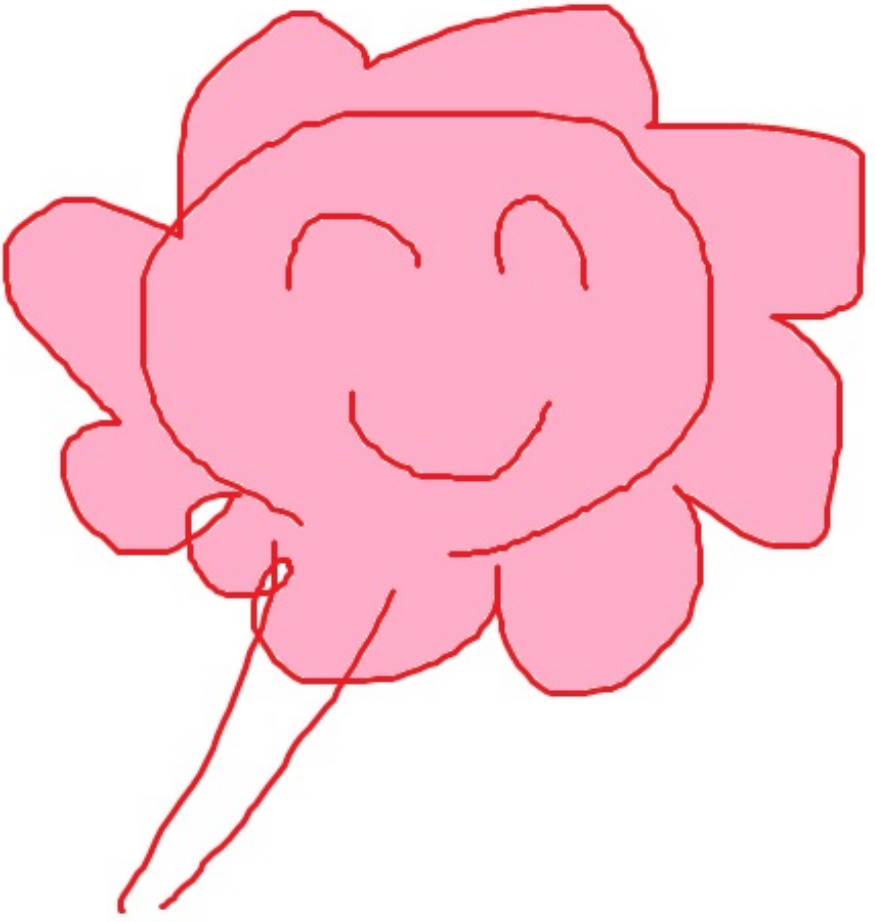
ロックンロールの循環

最終局面、フィオレは真実を知る。

幼い頃、フィオレが衛からもらった大切な花は実はうさぎが衛にあげたものだった。

フィオレが受け取った感動はうさぎが衛にあげたものによってもたらされていたものということになる。

もらったものを人に与え、それをもらったものが同じように人に与える。これはロックンロールの循環だ。



これはロックンロールの循環だ。

そして、うさぎはフィオレすら救うことを口にする。

「みんなを守る力を。だれも独りにしない力を」と言い、命をエネルギーに変換して捨て身の力を出す。

ロックバンドが魂を燃やして生み出す力に見える。

それはヘラヘラ歌って出るものではない。それで出てるように見えるのはロックバンドの、あるいはその曲の磁場であり、だれも独りにしない力が出ているわけではない。魂を燃やし尽くす様がなければ生まれない。神聖かまってちゃんはだれも孤独にしない力を出そうとしている。上から目線や上からの立場では決して生まれない。孤独と救済の気持ちがセットでやっと初めて生まれるか生まれないかが独りにしない力だ。ブルーハーツはそれを持ってたと思う。でもハイロウズには感じなかった。神聖かまってちゃんもその力が永遠に続くわけではないのだろうと思う。だからこそ安定してしまいそうでしない危ういテンションの今、しか生まれないエネルギーが神聖かまってちゃんにはある。

ロックバンドが魂を燃やす

「みんなを守る力を。だれも独りにしない力を」と言い、命をエネルギーに変換して捨て身の力を出す。

ロックバンドが魂を燃やして生み出す力に見える。

それはヘラヘラ歌って出るものではない。
それで出てるように見えるのはロックバンドの、あるいはその曲の磁場であり、だれも独りにしない力が出ているわけではない。

魂を燃やし尽くす様がなければ生まれない。

かまってちゃんは独りにしない力持っている

神聖かまってちゃんはだれも孤独にしない力を出そうとしている。上から目線や上からの立場では決して生まれない。
孤独と救済の気持ちがセットでやっと初めて生まれるか生まれないかが独りにしない力だ。

ブルーハーツはそれを持ってたと思う。例えば、ハイロウズにはそれを感じられなかった(違う方にギアを入れ直した)。

あえて言うと、神聖かまってちゃんもその力が永遠に続くわけではないのだろうと思う。
だからこそ安定してしまいそうでしない危ういテンションの今、しか生まれないエネルギーが神聖かまってちゃんにはある。

孤独と救済の物語

劇場版セーラームーンRは非常に優れたロックンロールだった。

孤独と救済の物語だ。

神聖かまってちゃんもそこに流れる同じ血を感じる。

最後に、、、劇場版セーラームーンRの幾原監督はこう言っている。

「基本的に世界を変えたいとか革命したいという感情は健全なものなんだよ。一連の宗教事件なんかでさ、わりとこういうことが気分の悪いことだみたいに喧伝されているけど、実はそうじゃない。生まれたときから他人に決められたルールを無自覚に受け容れる方がどうかしてるよね。」

幾原監督、それはまさにパンクロックだよ。

セーラームーンと神聖かまってちゃん

http://p.booklog.jp/book/81417

著者：yuugata222
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/yuugata222/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/81417

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/81417

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ